「みづゑ」舊刊の蒐集に勤めずとも、この一卷もつてその恨みを療すべきことを附言致すべく候。この點に於て「ホトトギス」の「さし畫」に比較すべきものかと覺えられ候。

愚かなることを長々しくも書き申て候。

九月七日　山崎生

大下先生

弔辭四篇

京都都鳥英喜

○大下君居常頗る常識に富み、人格亦崇高にして、友情殊に厚かりし事は、一ト度君に接したる者の永く君を忘れざる其德頌するに餘りあり、君水彩畫を以て起ち、研究所を興して子弟を敎導し、私財を投して雜誌を發刊し、以て天下に洋畫の趣味を普及し鼓吹し、或は講演に或は講習會に、每時其の先頭軍となり、斯道に貢献したる功績、極めて顯著なりと云ふべし、近時洋畫勃興の端緒、實にこゝに存すると言ふも豈に過言にあらざるなり、吾人常に君の熱誠なる勞苦を多謝し、敬意を表する所謂なり、君前途猶遼遠にして、其の勞を待つ事最多し、突如君病を以て斃れ、白玉樓中の人と化す、訃報に接し、愕然として言ふ處を不知、君今夏山陰に旅し、予又山陰に遊ぶ、山險に道遠くして、遂に語るの機あらざりしを惜む、君今や亡し嗚呼悲哉。

明治四十四年十月

東京五姓田芳柳

小生は大下君と交ることゝ餘り深からず、曾て巖谷小波君等と青梅に紅葉を探りしとき、宿屋の寢卷の儘、突